

疑問文における終助詞〈ね〉と〈な〉

林 淳子

1. 本稿の目的と留意点

1. 1 本稿の課題

それ自身が疑問の意味を持つと言える「か」を除くと、疑問文末に付く終助詞には「ね」「な」「よ」がある。このうち「な」は、助詞「か」に接続した「～かな」の形で疑問を自問風に表明するという使い方が目立つ。

(1) 「最近連絡が来ない鳥取のおじさん、元気なかな?」

ここで「自問の文型」と言わず「自問風に表明する」と言うのは、(1)の文が実際に自問表現に用いられるだけでなく、自分の疑問を人に聞かせる表現としても用いられることがあり、その結果「それが、病气らしいのよ」などと返事を引き出すことまでであるためである。

また、「な」ではなく「ね」が付いた疑問文も同様に自問風の疑問表明の文となる。

(2) 「最近連絡が来ない鳥取のおじさん、元気なかね?」

このような「かな」と「かね」の意味の共通性に言及した先行研究には熊野 2000 や三宅 2011 がある^{#1}。どちらも現代共通語において「かな」は普通体、「かね」は丁寧体の疑問文に用いられる傾向があるとして、「かな」と「かね」を一種の異形態とみなしている^{#2}。

しかし、文末に「か」のない疑問文や、事態がそのようなにあるか否かではなく相手の意

注1 この「かな=かね」説の理論的前提には、田窪・金水 1996 が述べる『『な』と『ね』はほとんど同じ機能を持つ助詞である』(p.71 注9) という考え方がありようである。指示詞や終助詞といった言語形式の意味を言語使用から切り離して説明する田窪・金水 1996 においては、『『ね』が必ず聞き手に対する語り掛けの場面で用いられるのに対し、『な』は語り掛けにも独り言にも使える』という使用上の違いを抜きにすれば、「当該の命題の妥当性を計算中であるという標識である」という点で両者は同じだと考えるのである。これを受けて「ね」と「な」が共通してもつ意味・機能を指摘した研究には、熊野 1999・宮崎 2005・篠田 2006 などがある。

注2 その上で熊野 1998 は、広島方言では共通語と違って「かね」が普通体・丁寧体の両方に用いられる傾向があるとしている。

向がどのようなかを問題にする疑問文にまで視野を広げれば、疑問文末の終助詞「ね」と「な」が付加可能性や意味の面においていつも同じようにあるわけではないという事実に行き当たる。

(3)「どこへ行こう {ね/*な} ?」

(4)「そろそろ行こうかね?」

(5)「そろそろ行こうかな?」

(3)のように疑問文末に付くことができるか否かという付加可能性の面で「ね」と「な」の間に違いが現れる場合もあれば、(4)(5)のように同じ疑問文に付きながら意味合いが異なる場合もある。(4)には相手の意見を聞きたいという話し手の気持ちを感じられるのに対して、(5)はそのようなニュアンスがなく、話し手の独り言でしかない。

本稿はこのような事実に基づき、「かな=かね」という図式は多様に広がる疑問文の限られた一角でのみ成立するという見通しを立てる。話し手が何を「分からない」と感じ、その「分からない」感をどのような態度で表明するか、そしてそれがどのように形式に現れるかという観点で見れば、疑問文にはさまざまなものがある。その中のどの部分で「かな=かね」という図式が成り立っているのか。それ以外のところでは「ね」「な」はそれぞれどのようなふるまいをしているのか。これらを明らかにすることによって上の見通しの妥当性を検証するのが、本稿の目的である。そこで以下では、次の二点について調査した結果を述べる。

- ・多様な疑問文のうち、どのような形式のものに終助詞「ね」「な」が付くのか。
- ・「ね」も「な」も付かない疑問文、「ね」が付いた疑問文、「な」が付いた疑問文の表現機能は、一致するのか。

1. 2 「ネ」と「ネエ」、「ナ」と「ナア」の区別

疑問文における終助詞「ね」のあり方を調べるにあたっては、「ね」と「ねえ」を区別しておく必要がある。というのも、橋本 1993 が指摘するように、上昇イントネーションあるいは通常の下降イントネーションの「ね(↑/↓)」と大きな下降のイントネーションの「ねえ(↓)」では「意味的なはたらき」に「明確な区別がある」(p.712)からである。

(6)「山田くんは本当に来るのかね?(↑/↓)」

(7)「山田くんは本当に来るのかねえ?(↓)」

たとえば、(6)は年配の男性が目下の者に対して、答えを求めて質問する表現であるのに対し、(7)は話し手の年齢や性別を問わず使えるけれども、質問にはなりえず、疑問を自問風に表明する表現である。橋本 1993 は(6)のようなタイプを「問い+文体変化」と呼び、(7)のようなタイプを「疑い+同意要求」と呼んで区別している。

そこで、以下本稿では「ネ」と「ネェ」を区別して調査や考察を行う。検討における「ね」と「な」の並行性を保つため、「ナ」と「ナァ」も同様に区別する。延ばさない「ネ」と延ばす「ネェ」を合わせた終助詞「ね」について言及する際には<ね>と表記する（<な>も同様）。後述するようにすべての疑問文においてこの区別が必要なわけではないが、違う場合もあれば違いがない場合もあるのだから、ひとまず<ね>を「ネ」と「ネェ」に分け、<な>を「ナ」と「ナァ」に分けておくことには意味があると言えるであろう。

2. 終助詞付加の可否

疑問文の文末形式にはさまざまなものがある。助詞「カ」・助詞「ノ」・助動詞「ウ」・「ヨウ」「ダロウ」が単独で、あるいは連携して疑問文を構成する。一方で、これらの形式がひとつも参加しない疑問文もある。そして、疑問文末へ終助詞<ね><な>を付加することが可能か否かは、この文末形式に大きく左右される。そこで、本稿の考察の出発点として、疑問文の文末形式ごとに「ネ」「ネェ」「ナ」「ナァ」を付加することが可能か否かを調べた^{注3}。その結果を表1に示す^{注4}。

表1では各文末形式のY/N疑問文、Wh疑問文のそれぞれについて、終助詞「ネ」「ネェ」「ナ」「ナァ」の付加が可能か否かを記号で示している。ただし、Wh疑問文しか存在しない文末形式もある。記号の表す内容は以下の通りである。

○：話し手が誰であっても、その終助詞の付加が可能である。

（例）「太郎はどこに行ったんだろうね？」（表1・11番の「ネ」）

△：話し手が年配の男性である場合に限って、その終助詞の付加が可能である。

（例）「太郎はどこに行ったんだね？」（表1・7番の「ネ」）

×：その終助詞を付加することができない。

（例）「*どこに行ったのね？」（表1・6番の「ネ」）

平叙：その終助詞を付加すると平叙文になる。本稿は、いわゆる確認要求をする文を、話し手が相手の同意表明を期待しながら、話し手自身の見解を述べる文（平叙文）であると考える。

（例）「雨降ってるね。」（表1・1番の「ネ」）

注3 調査は稿末に挙げた資料と作例を用いて行ったが、本稿に挙げる例文はすべて作例である。

注4 「カシラ」「ッケ」なども疑問文の文末を構成する形式ではあるが、「カ」や「ノ」と同列には並べられない面もあるので、本稿では扱わない。

表 1

	文末形式		例文	ネ	ネエ	ナ	ナア
1	～φ	Y/N	雨降ってる？	平叙	平叙	平叙	平叙
2		Wh	どこに行った？	△	×	×	×
3	～カ	Y/N	雨降ってるか？	○	○	○	○
4		Wh	どこに行ったか？	○	○	○	○
5	～ノ	Y/N	雨降ってるの？	平叙	平叙	×	×
6		Wh	どこに行ったの？	×	×	×	×
7	～ノダ	Wh	どこに行ったんだ？	△	×	×	×
8	～ノカ	Y/N	雨降ってるのか？	○	○	○	○
9		Wh	どこに行ったのか？	○	○	○	○
10	～ダロウ	Wh	どこに行っただろう？	○	○	○	○
11	～ノダロウ	Wh	どこに行っただらう？	○	○	○	○
12	～シヨウ (推量)	Wh	どこにある？	○	○	×	×
13	～シヨウ (意志)	Wh	どこへ行こう？	○	○	×	×
14	～ダロウカ	Y/N	雨降ってるだろうか？	○	○	○	○
15		Wh	どこに行っただらうか？	○	○	○	○
16	～ノダロウカ	Y/N	雨降ってるのだろうか？	○	○	○	○
17		Wh	どこに行っただらうか？	○	○	○	○
18	～シヨウカ (推量)	Y/N	明日は晴れようか？	○	○	○	○
19		Wh	いつになったら晴れようか？	○	○	○	○
20	～シヨウカ (意志)	Y/N	そろそろ行こうか？	○	○	○	○
21		Wh	どこへ行こうか？	○	○	○	○
22	～デス ^{注5}	Wh	どこがいいですか？	×	×	×	×
23	～マス	Y/N	雨降ってます？	平叙	平叙	平叙	平叙
24		Wh	どこに行っています？	×	×	×	×
25	～ノデス	Wh	どこに行っただんです？	×	×	×	×
26	～デスカ	Y/N	おいしいですか？	○	○	△	△
27		Wh	どこがいいですか？	○	○	△	△
28	～マスカ	Y/N	雨は降っていますか？	○	○	△	△

注 5 「おいしいですか？」のような Y/N 疑問文は、普通体の「おいしい？」が状況に支えられて疑問文になりうるという一般則に飲み込まれて疑問文として定着しつつあるが、地域によって許容度に差があるため、ここでは挙げない。「雨降ってるんです？」も同様。

29		Wh	どこに行っていますか?	○	○	△	△
30	～ノデスカ	Y/N	雨降ってるんですか?	○	○	△	△
31		Wh	どこに行ったんですか?	○	○	△	△
32	～デショウ	Wh	どこに行ったでしょう?	○	○	△	△
33	～ノデショウ	Wh	どこに行ったんでしょう?	○	○	△	△
34	～シマショウ(推量)	Wh	どこにありましよう?	○	○	△	△
35	～シマショウ(意志)	Wh	どこへ行きますよう?	○	○	△	△
36	～デショウカ	Y/N	雨降ってるでしょうか?	○	○	△	△
37		Wh	どこに行ったでしょうか?	○	○	△	△
38	～ノデショウカ	Y/N	雨降ってるんでしょうか?	○	○	△	△
39		Wh	どこに行ったんでしょうか?	○	○	△	△
40	～シマショウカ	Y/N	明日は晴れましようか?	○	○	△	△
41	(推量)	Wh	いつになったら晴れましようか?	○	○	△	△
42	～シマショウカ	Y/N	そろそろ行きましようか?	○	○	△	△
43	(意志)	Wh	どこへ行きますようか?	○	○	△	△

以上の一覧から、終助詞<ね><な>の付加に関するルールは次の三条に整理される。

(イ) 文末が「ノ(ダ)」あるいは「φ」である疑問文には、普通体であっても丁寧体であっても、基本的に終助詞<ね><な>の付加は許されない(1,2,5,6,7,22,23,24,25)。例外として、「どこに行ったのだね?」のように、「ネ」の付加が年配男性に限って許されるのみである^{#6}。

(ロ) 文末が「ノ(ダ)」でも「φ」でもない疑問文のうち、丁寧体の文(26～43)では<な>の付加が年配男性にしか許されない。

(ハ) 文末が「ショウ」の文(12,13)は<な>の付加が許されない。

かくして、話し手が誰であっても「ネ」「ネエ」「ナ」「ナエ」の4つすべての付加が可能なのは、文末が「カ」あるいは「ダロウ」である普通体の疑問文のみということになる。

注6 中野 1993、堀崎 1995 によれば、江戸語では文末が「φ」の疑問文にも終助詞<ね><な>が付くようである。たとえば次の通り。「どふして知つたな。」(中野 1993(12))、「ナゼ人ハ、何もかぶらずに生れるねへ。」(中野 1993(24))、「何をしてゐるな。」(堀崎 1995・例5)

3. 終助詞付加による表現機能の変化

次に、これらの終助詞が付くと疑問文の表現機能はどのように変わるか（あるいは変わらないか）を調べる。当然のことではあるが、終助詞<ね><な>が付いても疑問の内容は変わらない。「雨降ってるか?」、「雨降ってるかね?」、「雨降ってるかな?」のどれであっても、疑問の内容は「雨が降っているか否か」ということである。<ね><な>の付加によって変化する可能性があるのは、その文が会話の中でどのような役割、機能を果たすかという点である。本稿ではこれを文の表現機能と呼ぶ。

前節で明らかになった、「ネ」「ネエ」「ナ」「ナア」の4つすべての付加が可能な疑問文は、終助詞が付いていないときの表現機能と「ネ」「ネエ」「ナ」「ナア」が文末に付加したときのそれぞれの表現機能とを比べることによって、下の三つのグループに分けることができる。

(I) 「ネ」と「ネエ」で表現機能が異なる。(表1の3,4,8,9)

(II) <ね>と<な>で表現機能が異なる。

グループ(II)は、さらに二つに分かれる。

①<ね>も<な>も付かない文の表現機能は<ね>が付く文の表現機能とも<な>が付く文の表現機能とも異なる。(表1の20,21)

②<ね>も<な>も付かない文の表現機能は<な>が付く文の表現機能と同じである。(表1の10,11,14,15,16,17,18,19)

以下では、このグループごとに、終助詞が付加した際の表現機能を詳しく見ていく。

3. 1 グループ(I) - 「ネ」と「ネエ」 -

グループ(I)は、表1の3,4,8,9の疑問文、すなわち文末が「カ」あるいは「ノカ」の普通体疑問文である。これらの疑問文に終助詞「ネ」「ネエ」が付いたときの表現機能は以下の表2のようである⁷⁾。

表2

	ネ(↑/↓)	ネ(→)	ネエ
3 雨降ってるか?	解答要求	解答誘発または 判断不能感表明	解答誘発または 判断不能感表明

注7 以下の↑、↓、→という音調表示は、助詞の部分だけの音調（音の高さ）ではなく、述語文節全体の上昇調、下降調、いずれでもない調子という意味である。

4	どこに行ったか?	解答要求	解答誘発または 判断不能感表明	解答誘発または 判断不能感表明
8	雨降ってるのか?	解答要求	解答誘発または 判断不能感表明	解答誘発または 判断不能感表明
9	どこに行ったのか?	解答要求	解答誘発または 判断不能感表明	解答誘発または 判断不能感表明

「雨降ってるか?」を例に説明をする。

(8)「雨降ってるかね? (↑/↓)」

(9)「雨降ってるかねえ?」

延ばさない「ネ」を付けて上昇調あるいは下降調で言う(8)は、年配男性特有の質問表現である。たとえば、上司が窓辺にいる部下に「外では雨が降っているか否か」を尋ねるときに用いる。本稿では、質問表現のことを、相手に答えを求めるという意味で解答要求表現と呼ぶ。一方、延ばす「ネエ」の付く(9)は、話し手の「雨が降っているか否か分からない」という疑問感情を自問風に表明する文である。これはもちろん聞き手を目指さない判断不能感表明にも使えるが、聞き手がいる状況ではこの疑問表明を聞いた人が答えてくれることもある。たとえば、窓のない部屋で昼食をとっている数人の内の一人が「朝は曇りだったけれど、今はもう雨降ってるかねえ?」と疑問を表明すると、一緒に昼食をとっている別の人が「私、さっき外に行ったけれど、まだ降ってなかったよ。」などと答えてくれる場合などである。相手に答えを求める表現ではないけれども結果的に答えを引き出すことになる、このような表現を本稿は解答誘発表現と呼ぶ。解答要求表現と解答誘発表現は、結果的に疑問を解消する答えを相手から引き出すことになる点では同じだが、答えの引き出し方という点では異なる。前者は積極的に相手が答えないといけないところまで追い込んでいる、つまりけんかをしないつもりなら聞き手は必ず何か返事をしなければならないのに対し、後者では話し手の判断不能感表明を聞かされた聞き手は、人間関係を悪くしないためには、最低限疑問感情の共有を示す(「そうねえ」という表情でうなずくとか、首をかしげるなど)だけでもよく、場合によって「放っておけない気持ち」になって答えることもありうるという表現である。

このように、グループ(I)においては、「ネ(↑/↓)」が付くと解答要求表現であり、「ネエ」が付くと解答誘発表現であるというように、「ネ」と「ネエ」で表現機能が異なる。ただし、延ばさない「ネ」が付く場合に必ず解答要求表現になるというわけではないことに注意が必要である。

(10)「雨降ってるのかね? (→)」

延ばさない「ネ」であっても、(10)のように上昇調でも下降調でもない場合がある。この文の表現機能は、上の(9)「雨降っているのかねえ?」の表現機能にきわめて近い。

すなわち、聞き手を目指さない判断不能感表明にもなるが、聞き手がいる状況では「朝から曇りだったけれど、今はもう雨降ってるかね? (→)」と疑問を自問風に表明することによって、相手を「放っておけない気持ち」にならせる表現である。この、上昇調でも下降調でもない「ネ (→)」は「ネ (↑/↓)」と異なり、話し手が年配男性に限定されることはない。

以上で見てきた、Y/N 疑問文における

- { 「ネ (↑/↓)」 …… 解答要求表現
- { 「ネ (→)」 「ネエ」 …… 解答誘発表現または判断不能感表明

という表現機能の違いは Wh 疑問文にも見られる。

(11) 「君、あの書類はどこに行ったかね? (↑/↓)」 …… 解答要求表現

(12) 「さて、あの書類はどこに行ったかねえ?」

…… 解答誘発表現または判断不能感表明

(13) 「うーん、あの書類はどこに行ったかね? (→)」

…… 解答誘発表現または判断不能感表明

また、「ネ」「ネエ」が付いた例文をいちいち挙げることはしないが、「雨降ってるのか?」「どこに行ったのか?」のような文末形式が「ノカ」である文の表現機能も、上で述べた文末形式が「カ」である文の場合と同様に、「ネ (↑/↓)」と「ネ (→)」「ネエ」で解答要求か解答誘発 (または判断不能感表明) かに割れる。

一方、「ネ」と「ネエ」の間に見られるような違いは「ナ」と「ナア」の間には見られない。グループ (I) の疑問文に「ナ」「ナア」が付くときの表現機能を次の表 3 に示す。

表 3

		ナ (↑/→)	ナア
3	雨降ってるか?	解答誘発または 判断不能感表明	解答誘発または 判断不能感表明
4	どこに行ったか?	解答誘発または 判断不能感表明	解答誘発または 判断不能感表明
8	雨降ってるのか?	解答誘発または 判断不能感表明	解答誘発または 判断不能感表明
9	どこに行ったのか?	解答誘発または 判断不能感表明	解答誘発または 判断不能感表明

延ばさない「ナ」と延ばす「ナア」、どちらが付いても疑問文は解答要求表現にはならない。「雨降ってるか?」に「ナ」「ナア」が付いた例文を挙げる。

(14)「雨降ってるかな? (↑)」…解答誘発表現または判断不能感表明

(15)「雨降ってるかな? (→)」…解答誘発表現または判断不能感表明

(16)「雨降ってるかなあ?」…… 解答誘発表現または判断不能感表明

延ばさない「ネ」が付いた述語文節の音調には上昇調・下降調・そのどちらでもない音調があったが、延ばさない「ナ」には下降調はない。延ばさない「ナ」が付く文は上昇調であっても(14)、まともに答えを求める表現にはなりえない。「ナ(→)」「ナァ」が付く文(15)(16)と同様に、解答誘発表現または判断不能感表明である。

以上、グループ(I)の疑問文に終助詞<ね>が付くとき、延ばさない「ネ」が上昇調か下降調で付く場合には解答要求表現であり、「ネ(→)」と「ネェ」の場合には解答誘発表現であることを見た。このような表現機能の違いは<ね>に特有のもので、<な>には見られなかった。

3. 2 グループ(II) ①-<ね> (「ネ」「ネェ」と<な> (「ナ」「ナァ」) -

グループ(II) ①は表1の20,21の疑問文、すなわち文末形式が「~シヨウカ(意志)」の疑問文である。これらの疑問文では、<ね>も<な>も付かない場合・<ね>が付く場合・<な>が付く場合の表現機能の違いが顕著である。まずは【Y/N ~シヨウカ】(表1の20番)について次の表4にまとめる。

表4

		<ね>も<な>もなし	<ね>	<な>
単独行為	荷物持とうか?	応諾反応要求 または躊躇感表明	応諾反応誘発	躊躇感表明
共同行為	そろそろ行こうか?	応諾反応要求 または躊躇感表明	応諾反応誘発	躊躇感表明

まず、<ね>も<な>も付かない疑問文は、話し手が実現を目指す行為について相手に応諾反応(「うん」という返事)を求める表現でありうる。たとえば、「荷物持とうか?」は「あなたの荷物を持つ」という話し手の意志する行為の実現について、相手の意向を問うている。本稿ではこのような表現を応諾反応要求表現と呼ぶ⁸⁾。応諾反応要求表現には話し手が単独で行う行為について申し出て相手の応諾反応を求めるもの(「荷

注 8 本稿筆者は解答要求表現と応諾反応要求表現とは同次元に並ぶ別々の表現であると考えている。両者の関係など詳細は別稿で述べる予定である。

物持とうか?」)と、話し手と聞き手が共同で行う行為について応諾反応を求めるもの(「そろそろ行こうか?」)とがある。単独行為であっても共同行為であっても、終助詞付加による表現機能の変化の点では違いがないので、以下では特に区別せずに扱う。

なお、<ね>も<な>も付かない「荷物持とうか?」「そろそろ行こうか?」は、応諾反応を求めるという表現のほかに、自分がそのような行為をするべきか否か第三者に相談する表現や、独り言で躊躇感を表明する表現にもなりうる。

このグループの疑問文の、<ね>も<な>もなし・<ね>付加・<な>付加の三者の表現機能の違いは次の例文を見れば明らかであろう。

(17)「俺たち、そろそろ結婚しようか?」……応諾反応要求表現または躊躇感表明

(18)「俺たち、そろそろ結婚しようかね?」…応諾反応誘発表現

(19)「俺たち、そろそろ結婚しようかな?」…単なる躊躇感表明

<ね><な>の付かない(17)は、単なる躊躇の独り言でなく結婚相手に向かって返事をさせようとする持ちかけである状況においては、話し手が実現を希望する共同行為「俺たちがそろそろ結婚する」ことについて聞き手の応諾反応を要求する表現であり、プロポーズの言葉として三者の中でもっとも自然である。次に、<ね>が付いた(18)は、行為企図に関する躊躇感を相手に見せて反応してもらおうとする表現である。本稿ではこのような表現を応諾反応誘発表現と呼ぶ。(18)は、<ね>の付かない(17)のようにまともに答えを求める表現ではない点でどこか「逃げている」印象があり、プロポーズの言葉としては頼りなく感じられるものの、「うん」という返事(応諾反応)を引き出すことは十分にある。最後に、終助詞<な>が付いた(19)は、その行為を行うべきか否か話し手がひとりで躊躇していることの表明でしかない。したがって、応諾反応誘発表現にすらならない。プロポーズの言葉だとしたら非常に遠回しな言い方であり、ともすれば「共同行為のはずなのに一人で勝手に考えている」ように感じられ、相手を不快な気持ちにさせるかもしれない。このように、グループ(Ⅱ)①の疑問文は、<ね>も<な>も付かない文・<ね>が付く文・<な>が付く文の表現機能がすべて異なるのであった。

なお、グループ(Ⅱ)①においては、延ばさない「ネ」か延ばす「ネエ」という区別は必要ない。「そろそろ行こうかねえ?」と延ばす「ネエ」を付けても、延ばさない「ネ」が付いた「そろそろ行こうかね?」と同じく応諾反応誘発表現である。また、延ばさない「ナ」と延ばす「ナア」の区別も必要ない。「そろそろ行こうかな?」でも「そろそろ行こうかなあ?」でも、躊躇感表明である。

次に、【Wh～シヨウカ】(表1の21番)について表5にまとめる。

表 5

		<ね>も<な>もなし	<ね>	<な>
単独行為	どれを持とうか?	解答要求、解答誘発、 または迷い表明	解答誘発	迷い表明
共同行為	どこに行こうか?	解答要求、解答誘発、 または迷い表明	解答誘発	迷い表明

表 4 と同様、単独行為の場合と共同行為の場合を挙げているが、結果的に両者において表現機能の差はない。以下、単独行為の場合を例に説明する。

(20) 「どれを持とうか?」……解答要求表現、解答誘発表現、迷い表明

(21) 「どれを持とうかね?」…解答誘発表現

(22) 「どれを持とうかな?」…自分の迷いの表明

相手の荷物のうちどれかを話し手が持ってあげようとする場面で三つの疑問文を比べると、<ね><な>の付かない(20)はまず、複数の荷物の中でどれを持つべきか相手に尋ねる、解答要求表現でありうる。同じ(20)でも、荷物の持ち主の前で自問風に言えば、まともに答えを求めるわけではないけれども、どれを持つべきか分からないという話し手の疑問を相手に聞かせることによって反応してもらおうとする解答誘発表現である。これに加えて、(20)は、荷物の持ち主に向かってでなく独り言として言えば、話し手が自分の意志の問題として「どれを持つか」迷っていることを表明する表現である。このように<ね>も<な>も付かない(20)は解答要求表現・解答誘発表現・迷い表明のどれにでもなりうる。これに対して、<ね>が付いた(21)は解答誘発表現にしかならない。まともに答えを求める解答要求表現として使うことはないし、独り言の迷い表明として言うこともできない。一方、<な>の付いた(22)には、どれを持つべきか分からないから相手に答えてほしいという話し手の気持ちは感じられない。したがって(22)は、迷い表明でしかありえない。また、例文は省くが、話し手と聞き手の共同行為を問題にする場合も、終助詞付加による表現機能の違いは単独行為の場合と同様である。

以上のように、グループ(Ⅱ)①の疑問文に<ね><な>が付加するときの表現機能は、<ね>も<な>もなし・<ね>付加・<な>付加の三者で大きく異なる。グループ(Ⅱ)①の Wh 疑問文の場合、<ね>も<な>も付かない文は解答を要求する表現にも、解答を誘発する表現にもなり、さらには要求も誘発もせずただ話し手の疑問感情を表明する表現にもなりうるのに対して、<ね>が付く疑問文は解答を誘発する表現にしかならない。また、グループ(Ⅱ)①の Y/N 疑問文の場合、<ね>も<な>も付かない文は応諾反応要求か躊躇感表明であるのに対し、<ね>が付く疑問文は応諾反応誘発の表現になる。そして、<な>が付く疑問文はそれら相手の返事を引き出すことのない、話し手の疑問感情を表明しただけで完結するような表現である。また、このグループでは、

「ネ」と「ネエ」、「ナ」と「ナァ」の区別は問題にならない。

3. 3 グループ (II) ②-〈ね〉(「ネ」「ネエ」と〈な〉(「ナ」「ナァ」) -

最後に、グループ (II) ②について簡単に触れておく。グループ (II) ②は「ダロウ」や推量の「シヨウ」が参加する普通体の疑問文である。グループ (II) ②は、〈ね〉も〈な〉も付かない疑問文が解答要求表現にならないという点でグループ (II) ①と異なる。グループ (II) ②の疑問文は、〈ね〉や〈な〉が付いていようがまいが、基本的には解答誘発表現なのである。しかし、必ず解答誘発表現になるか、他の表現になる可能性もあるかの点では一様ではない。一覧にすると、次の表6のようである。

表6

		〈ね〉も〈な〉もなし	〈ね〉	〈な〉
10	どこに行っただろう？	解答誘発または判断不能感表明	必ず解答誘発	解答誘発または判断不能感表明
11	どこに行っただらう？	解答誘発または判断不能感表明	必ず解答誘発	解答誘発または判断不能感表明
14	雨降ってるだらうか？	解答誘発または判断不能感表明	必ず解答誘発	解答誘発または判断不能感表明
15	どこに行っただらうか？	解答誘発または判断不能感表明	必ず解答誘発	解答誘発または判断不能感表明
16	雨降ってるんだらうか？	解答誘発または判断不能感表明	必ず解答誘発	解答誘発または判断不能感表明
17	どこに行っただらうか？	解答誘発または判断不能感表明	必ず解答誘発	解答誘発または判断不能感表明
18	明日は晴れようか？	解答誘発または判断不能感表明	必ず解答誘発	解答誘発または判断不能感表明
19	いつになったら晴れようか？	解答誘発または判断不能感表明	必ず解答誘発	解答誘発または判断不能感表明

「どこに行っただらう？」を例に説明する。

- (23) 「山田君は旅行に行くって言っていたけれど、どこに行っただらう？」
- (24) 「山田君は旅行に行くって言っていたけれど、どこに行っただらうね？」
- (25) 「山田君は旅行に行くって言っていたけれど、どこに行っただらうな？」

聞き手を目指して言う場合、(23)～(25)はすべて解答誘発表現である。たとえば、夏休みの研究室にいる数人の学生で、最近姿を見ない山田君について話題にする場面を考える。(23)～(25)はすべて、話し手が「山田君がどこに行ったのか分からない」という疑問感情を相手に見せ、見せられた相手は何か反応しなくてはならない気になる表現である。

このように、聞き手に対して持ちかければ解答誘発表現であるという点で三者は共通しているが、必ず解答誘発表現になるか否かの点では様ではない。〈ね〉も〈な〉も付かない文と〈な〉が付く文は、単なる独り言で判断不能感を表明する表現にもなりうる。

(26)「山田君、どこに行ったんだろう？」

(27)「山田君、どこに行ったんだろうな？」

(28)「山田君、どこに行ったんだろうね？」

二人で一緒に研究室にいた山田君がトイレに行ったきり一時間以上戻ってこない場면을想像する。残された話し手がひとり、判断不能感を表明する表現として〈ね〉も〈な〉も付かない(26)と〈な〉が付く(27)は適当であるが、〈ね〉が付く(28)は使えない。〈ね〉が付く文は必ず解答誘発表現なのである。

10,14,15,16,17,18,19 の文末形式の疑問文も、例文は挙げないが、すべて上記【Wh ～ ンドロウ】の場合と同様である。このように、グループ(Ⅱ)②の疑問文は〈ね〉〈な〉が付いても付かなくても解答誘発表現でありうるものの、必ず解答誘発表現であるか否かの点で〈ね〉と〈な〉が異なる。なお、前節で扱ったグループ(Ⅱ)①と同様、このグループでも「ネ」と「ネェ」、「ナ」と「ナァ」の区別は必要ない。

3. 4 第3節のまとめ

以上、終助詞「ネ」「ネェ」「ナ」「ナァ」のすべてを付加することが可能な疑問文について、それらの終助詞を付けた疑問文の表現機能は終助詞を付けない場合と同じであるか否かという観点から整理を行った。結果は以下の通りである。

{ 「ネ」と「ネェ」で表現機能が異なる。… (Ⅰ)
{ 〈ね〉と〈な〉で表現機能が異なる。… (Ⅱ)

さらに、〈ね〉〈な〉なしの文の表現機能が

{ 〈ね〉付加の文とも〈な〉付加の文とも異なる。… (Ⅱ) ①
{ 〈な〉付加の文の表現機能と同じである。… (Ⅱ) ②

このように見渡してみると、疑問文の全体にわたって終助詞〈ね〉と〈な〉が同じよ

うにはたらくわけではないことがよく分かる。「かな=かね」は本稿で言うグループ(I)の「ネ(→)」「ネエ」と「ナ(→)」「ナア」においてのみ、言えることなのであった。

<ね>の文と<な>の文で表現機能が異なるグループ(II)は、①が「シヨウ(意志)」の参加する疑問文であり、②が「ダロウ」「シヨウ(推量)」の参加する疑問文である。結局、撥ねテニヲハ(古代語のム、ラム、ケムに対応する現代語のウ・ヨウ、ダロウ)が述語を形成する疑問文では<ね>と<な>で表現機能が異なるのだということになる。また、「~ダロウカナ」「~シヨウカナ(推量)」は解答誘発表現になりうるのに「~シヨウカナ(意志)」は応諾反応誘発表現・解答誘発表現にならないという微妙な事実があることにも気が付く。それらはなぜそうなるのか。グループ(II)の疑問文への終助詞付加をめぐる気が付く問題に正当な説明を与えるためには、撥ねテニヲハが疑問文の形成に参加することの内実(「推量」という意味の問題ではない)についての考察が必要となる。

4. まとめ

本稿では、疑問文全体において終助詞<ね><な>の付加の様子がどのようなものであるかを調べた。まずは、さまざまな文末形式の疑問文に対して終助詞<ね><な>の付加が可能であるかを調べ、「ネ」「ネエ」「ナ」「ナア」のすべての付加が可能な疑問文を抽出した。そのうえで、それらの疑問文に終助詞が付加したときの表現機能を調べ、終助詞が付かないときの表現機能と比較した。その結果、終助詞の付加による表現機能の変化のあり方に応じて、それらの疑問文は三つのグループに分かれた。このなかには、<ね>と<な>で表現機能が大きく異なるというグループもあった。

このように<ね>と<な>の疑問文末における振る舞いが異なると指摘したからといって、本稿は、一部の疑問文において「かな=かね」であるということをも否定するものではない。疑問文グループ(I)では「ネ(→)」「ネエ」と「ナ(→)」「ナア」で差は出ないことを見た。

ある疑問文が、(A)<ね>も<な>も付いていない形であるか、(B)<ね>が付いた形であるか、(C)<な>が付いた形であるかによってどのように表現機能の差が生じるかというその差のあり方が、疑問文の文末形式で分類されたグループ(I)、グループ(II)①、グループ(II)②によって異なるのであった。ということは、終助詞<ね>と<な>の性質の違いによって、疑問文グループ(I)、(II)①、(II)②の異質性があぶり出されたということだと考えざるを得ない。この3グループの異質性が発生する論理を語るためには、撥ねテニヲハがどのようなメカニズムをもって疑問文形成に働くのかを正面から考えなければならぬ。加えて、推量方向(存在承認の側)の疑問文と意志方向(希求の側)の疑

問文^{注9}との重要な差が<ね><な>をめぐる上記の差をもたらすという論理も考えなければならぬ。疑問文の文型の問題として、それらを今後の課題としたい。

【資料】

テレビドラマ文字化資料（括弧内は放送回と放送日）：『古畑任三郎』（第34回・1999年5月25日）『夏の恋は虹色に輝く』（第1回・2010年7月19日、第7回・2010年8月30日）『任侠ヘルパー』（第5回・2009年8月6日）『SPEC～警視庁公安部公安第五課未詳事件特別対策係事件簿～』（第2回・2010年10月15日）『フリーター、家を買う』（第1回・2010年10月19日、第4回・2010年11月9日）『流れ星』（第4回・2010年11月8日）『秘密』（第1回・2010年10月15日）『ホテルノヒカリ2』（第二夜・2010年7月14日）『GOLD』（第2話・2010年7月15日）『美丘-君がいた日々-』（第2話・2010年7月17日）（以上の資料は、柏田亮太郎氏・渡邊洋平氏が2010年度東京大学文学部国語研究室に提出された特別演習レポートによる。）

映画シナリオ：『となりのトトロ』（'88年鑑代表シナリオ集）『釣りバカ日誌』『善人の条件』（同'89）『おもひでぼろぼろ』（同'91）『ひき逃げファミリー』（同'93）『Shall we ダンス?』（同'96）
テレビドラマ・映画ノベライズ本：『不機嫌なジーン』（フジテレビ出版）『続三丁目の夕日』（小学館）

【参考文献】

- ・尾上圭介 2006 「存在承認と希求－主語述語発生の原理－」『国語と国文学』83-10
- ・尾上圭介 2012 「不変化助動詞とは何か－叙法論と主観表現要素論の分岐点－」『国語と国文学』89-3
- ・熊野七絵 1998 「広島方言の文末の『かね』に関する研究」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』43-2
- ・熊野七絵 1999 「言語変化の過程として見た『ね』と『な』」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』44-2
- ・熊野七絵 2000 「文末の『かね』の意味・機能－『疑いの表現』としての位置づけ－」『広島大学留学生センター紀要』10
- ・篠田 裕 2006 「終助詞『な』と『ね』の認識的意味」『徳島文理大学比較文化研究所年報』22
- ・田窪行則・金水敏 1996 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3
- ・中野伸彦 1993 「江戸語の疑問表現に関する一つの問題－終助詞『な』『ね』が下接する場合の自問系の疑問文の形式－」『近代語研究 第九集』
- ・橋本 修 1993 「疑問形＋終助詞『ね』のあらわす意味の類型」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三

注9 文の意味はすべて存在承認が希求であるという認識（尾上 2006）の上に立って、非現実事態仮構の叙法形式である動詞シヨウ形が主文末にある場合は(1)その行為や事態が「今のところ存在しないが」いつかどこかで存在する」という<存在承認>（これがいわゆる「推量」）になるか、(2)「実現させたい」という<希求>（いわゆる「意志」など）になる以外にあり得ないと考えられる（尾上 2012）。

省堂

- ・堀崎葉子 1995 「江戸語の疑問表現体系について—終助詞カシラの原型を含む疑い表現を中心に—」『青山語文』25
- ・三宅知宏 2011 『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- ・宮崎和人 2005 『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』ひつじ書房
- ・山田 准 1991 「情報論における『〜カネ』の機能」『THE KANSAI LINGUISTIC SOCIETY』11

(はやし じゅんこ 大学院人文社会系研究科 博士課程3年)